科学と宗教の対話の基礎としての自然主義

David Ray Griffin, Religion and Scientific Naturalism を参考に

文学部キリスト教学三回　小柳敦史

問題設定

本演習において、宗教と科学の新たな関係構築のためにこれまでの宗教と科学の関係を見直す作業を、A.E.McGrath, *The Foundations of Dialogue in Science and Religion* に基づいて行ってきた。その中で、McGrath は Torrance の考えを引き継ぎ、両者については方法のレベルで対話の基礎が探究される必要があること、特にそれは世界についての説明可能性についてのものであることが述べられた。[1]そこでここでは、その一環として、世界を説明する立場の一つとして自然主義を取り上げ、David Ray Griffin, *Religion and Scientific Naturalism* の記述を参考に自然主義が宗教と科学の対話の基礎となりうるのか、考えてみたい。

始めに

本レポートは、David Ray Griffin, *Religion and Scientific Naturalism*, 2000.の全９章のうち、1.Science, Religion, and Worldview　2.The Modern Conflict Between Religion and Scientific Naturalism の二章の議論をまとめ、その妥当性を検討するという方法を取る。また、関連する内容については適宜 McGrath の議論と比較する。

引用文などで、本文中にページ数のみを示したものは David Ray Griffin, *Religion and Scientific Naturalism*, State University of New York Press, 2000.におけるページ数である。

１．科学と宗教の対立要因としての自然観

Griffin によれば、科学と宗教が対立するという確信は二つの同一視 equation を根拠としているという。それは、

① equation of religion with supernaturalism

② equation of science with a materialistic version of scientific naturalism

である。(Preface *xv*)　従って、科学と宗教の調和のためには①(有神論の)宗教共同体は超自然主義のあらゆる遺物 remnants を捨て去ること　②科学者共同体は還元主義的自然主義(reductionistic naturalism)を捨て去ること、が必要になる。(p.17,18)　ここで、a materialistic version of scientific naturalism とか reductionistic naturalism と呼ばれているものは、本書の中で maximal version of naturalism とか NATURALISMsam とまとめられているもので、感覚主義 sensationism 無神論 atheism 唯物論 materialism である自然主義の事である。(p.14)　本来、自然主義とは超自然の否定という意味しか持たないはずであり、このような自然主義は minimal version of naturalism とか NATURALISMns(ns は nonsupernaturalist の意味)と呼ばれる。(p.33) NATURALISMsam が何故宗教と対立するのか、それはこのような自然主義は超自然の自然への介入を否定するばかりではなく、人間の自由や神のあらゆる影響力、人生の究極的な意味をも否定するからである。(p.14)

---

[1] Alister E. McGrath, *The Foundation of Dialogue in Science and Religion,* Blackwell 1998（以下 *FDSR* と略）　p.34-35

よって、現状においては宗教と科学は、本質的ではないにしろ、対立していると Griffin は認識しており、それを克服するためには科学も宗教も NATURALISMns を共有する必要があると考えているようである。では、そもそも Griffin は「宗教」「科学」という概念をどう捉えているのだろうか。実はこれについてははっきりと言及されていない[2]。今までの記述から考えれば、宗教は scientific naturalism に対置されているので、何らかの自然観であり、神の影響や人生の意味について説明を与えるものであると考えてよいだろう。(実際の議論においてはキリスト教神学が対象とされている)　科学については「宗教と科学は二つの力 force であり、宗教は直観の力、科学は観察と演繹の力である」という Whitehead の言葉が引用されている(p.3)ことから、観察と演繹という方法に基づいて自然現象を説明するものであると考えてよいかと思う。Griffin は NATURALISMns という自然観を共有しながら、二つの異なった力として科学と宗教を捉え両者の協調を考えていく。しかし、その前に科学と宗教が対立してきた原因となった科学的自然主義と NATURALISMsam の同一視が必然的なものではないことを説明する。

２．科学的自然主義と NATURALISMsam の誤った同一視

新たな、そして正しい見方によれば科学と宗教の間に「闘争」や「戦争」があるというのは誇張だという。というのも科学と宗教の関係はもっと複雑なものだからである。(p.22,23)　そもそも科学的自然主義は一つのものではない。歴史的に見て大きく二つに分けられる。一つ目のものは心身二元論に基づく存在論的二元論 *ontological dualism* と、心身を統合する原理として、自然の法則を超越した神を要求する超自然的有神論 *supernaturalisitic theism* を前提とした、初期の近代科学的自然主義である。(p.25~27)　１８世紀になると、自然法則を超越した神という考え方が疑問視され、法則の制定者であり、創造の後には世界に直接関与しない神を考える理神論が盛んになった。しかし、超自然的有神論も理神論も悪の存在という問題に答えることが出来なかった。そこで、理神論は無神論へと進むことになる。(p.28,29)　また、神が世界に直接関与しないという考えと、科学的知見の蓄積によって、世界の出来事は適法 lawfulness であるという確信が高まったことにより、二元論は付随現象主義 epiphenomenalism を経て唯物論へと変化した。(p.28,29)　この過程における重要人物はダーウィンである。ダーウィン自身は本書においては理神論の完成者として扱われている。というのは、ライエルへの手紙の中で彼が自然への神の介入を明確に否定しているからである。それでも世界の起源については超自然的な創造者によってしか説明されえないと信じていたという意味でダーウィンは理神論者であった。しかしその後の科学者たちは世界の始まりといった問題についても自然主義的に考えるようになった。このような科学的自然主義が現代における科学者集団においては自明のことになっている。(p.34)　この二つの変化を経た無神論的唯物論が近代科学的自然主義の二つ目のものである。一つ目の科学的自然主義が宗教と協調出来ることは不思議は無いが、二つ目のものは宗教と闘争することになる。そして、科学的自然主義を後者の科学的自然主義に同一視することが科学と宗教は対立するという考えを広め、固定化してい

---

[2] McGrath はそれぞれの定義は重要だとしながらも、どのような定義を与えるかは慎重な態度であった。（*FDSR*　p.29~32）

るのである。この後者の科学的自然主義とはすなわち NATURALISMsam であり、宗教と科学の調和のためには科学的自然主義はもっと限られた意味で解釈されなければならないという。(p.33)

初期近代科学的自然主義は宗教と協調できるものであり、後期近代科学的自然主義が NATURALISMsam と同じものとされているので、初期近代科学的自然主義は NATURALISMns であると考えてよいように思える。初期近代自然主義は超自然的有神論であるとされているが、この神は心身の統合のために要請される神であり、自然現象には介入しない限り NATURALISMns と両立すると考えられる。

ダーウィンについては理神論者であったとされているが、ダーウィン自身の立場については簡単には言及できないように思う。Griffin はダーウィンが世界の創造には神を考えざるを得ないという発言をしていることを理由に挙げているが、ダーウィンは伝統的な神学的信条に敏感であったことが知られており、その発言を額面通りに受け取ることはできないからである。また、世界の創造と、人間を含めた生物種の創造は創造論において分離できない問題であり、両者に関するダーウィンの発言を分けて考えることもできないように思う。

３．誤った同一視の元凶――第一原因‐第二原因の枠組み

Griffin によれば科学的自然主義と NATURALISMsam が同一視される本当の理由を知るには科学的世界観が前提としている立場を知らなくてはいけない。そしてそれは神学の前提ともなっている第一原因‐第二原因の枠組み *scheme of primary and secondary causation* だという。(p.38)　第二原因は自然法則にのっとった因果関係の範囲における原因であり、第一原因は他に原因を持たない絶対的な原因である。第一原因‐第二原因は神学の枠組みではあるのだが、科学はその対象を第二原因に絞っているという意味で、科学も第一原因‐第二原因の枠組みを採用しているといえる。この枠組みで自然を見る限り、両者の調和は難しい。(p.39)　伝統的な神学者の立場からは、自然は大体において第二原因によって動いているものの時々奇跡や恩寵という形で第一原因である神が直接世界に関与するとされるのだが、このような考え方は宗教は超自然主義から離れなくてはならないとする Griffin の立場に反する。しかし、第一原因‐第二原因の枠組みの中で NATURALISMns を考えると、神は第二原因のみを通して世界に働きかけることになり、可能になるのは、汎神論、無神論、理神論しかないのである。(p.38)

科学と宗教がその世界観において、同じ枠組みを共有しており、その枠組み自体に問題があるという Griffin の指摘は興味深い。しかし気になるのは、先ほど述べた前期近代科学的自然主義の位置付けである。これも第一原因‐第二原因の枠組みを持っていると考えてよいのだろうが、NATURALISMns を持ちながら、汎神論、無神論、理神論のいずれにも属さないように見えるからである。ここで、NATURALISMns の”ns”、つまり「超自然の否定」ということが何を意味するのかを考える必要があるだろう。第一原因‐第二原因の枠組みの中では神は他に依存しない絶対的な原因、自然は相対的な因果関係であるとされているから、超自然の自然への介入の否定、という事は、①そもそも超自然的な原因は存在しない　②自然そのものが絶対的なもので、自然と超自然の区別はない　③超自然は自然とは区別された限定された領域にのみ働く(逆に言えば、神が働きを直接及ぼさない領域と

して自然が設定される)、　のいずれかを意味すると考えてよいと思う。そして、①②③がそれぞれ無神論、汎神論、理神論に対応しているといえる。理神論においては世界の創造という概念を自然法則を超えたものと考え、そこに神の働きが限定されているわけである。しかし、神の介入を限定する領域としては世界の創造以外にも考えられるだろう。前期近代科学的自然主義がその一例であるように思われる。これにおいては自然＝空間的領域から区別された精神的領域が設定されてそこに神の働きが限定されている。従って、神の働きが限定された領域にのみ働くという考え方には理神論以外の可能性が、神の働く領域の設定によって考えられると考えてよいように思える。また、無神論、汎神論を否定する神学と両立できるとすればこの方向しか残されていない。

また、Griffin は前期近代科学的自然主義から後期近代科学的自然主義に移り変わる過程を思想史としての必然のように描いており、前期近代科学的自然主義は無神論に至る道のりの一部であるように捉えているようである。(This(=理神論) compromise between naturalism and supernaturalism, accordingly, proved primarily to be a halfway house to complete atheism.　p.28)　しかし、この過程が必然的なものであったのかどうかは再考が必要なのではないだろうか。というのはこの過程においては McGrath が指摘していたように[3]職業集団としての神学者と科学者の対立といった要因が絡んでいるはずだからである。このように気になる点はあるものの、実際に科学的自然主義は NATURALISMsam に同一視される結果となっており、その背後に第一原因‐第二原因という枠組みがあるという分析は説得力があるように思う。

４．新たな自然主義―Whiteheadian Naturalism

第一原因‐第二原因の枠組みで世界を見る限り、宗教と科学の調和は難しいという結論が下された。では、どのような自然主義が宗教と科学の対話の基礎となりえると Griffin は考えているのだろうか。今までの議論を踏まえると、この自然主義は①自然の範囲内における宗教と両立し、②NATURALISMns に基づき③第一原因‐第二原因とは違った枠組みを必要とするものである。Griffin はこのような自然主義として Whitehead の思想に基づいた自然主義を採用する。というのは、Whitehead の世界観が非唯物論的な存在論と非感覚的な認識論に基づいた有神論的自然主義であるからである。(p.17)　この自然主義によれば、神の働きは自然的因果関係のパターンの一部であり、神は絶えずこの世界に働きかけている。従って、自然法則と呼ばれているものは長い間通用している神の習慣 long-standing habits であると解釈され、神は立法者ではなくなる。(p.42)　Griffin はこの世界観に基づき、さらに詳しい分析や個別の問題について論じていく。

Whitehead の世界観が Griffin の考える自然主義の条件を満たすことについては認めてよいように思う。よって、Whitehead の世界観が宗教と科学の対話の基盤になりえる可能性はありうるように思う。第一原因‐第二原因の枠組みの中では神の働きが絶対的なものであり、そのため自然主義と神学が両立する考え方としては神の働きを自然以外の領域に限定するしかないことをすでに見た。しかし、明らかにこの考え方では自然を対象とする科学と超自然をも対象とする宗教は異なる対象を持つことになり、同じ対話の基礎を持つ

---

[3] *FDSR*　p.21,22

ことは難しくなる。また、グリフィンによれば、その議論の妥当性は措くとして、神の働きの領域を限定する考え方は無神論へと移行していくことになる。このため、第一原因‐第二原因の枠組みそのものに問題があると判断されたわけである。その結果、第一原因である神ではなくなり、神の力は相対化されることになった[4]。つまり、神と自然との関係を考えるにあたり、絶対的な神の力の働く領域を限定するのではなく、神の力を相対化したのである。このような相対化された神が伝統的な神学の神と一致するのかはやはり問題となるだろう。また、自然主義の観点からも、神が常に世界に関与するという視点は自然と超自然の区別を曖昧にするのではないかという懸念がある。

結論

以上、Griffin の記述を見て、自然主義といっても一つではなく、自然主義を対話の基盤とするならば、対話の基盤となりえるのは超自然の否定という限られた意味での自然主義であるということは確認できたように思う。また、科学と神学が第一原因‐第二原因という共通の枠組みを持っており、この枠組み自体が問題の原因であるという指摘も注目すべき点があり、それに代わる新たな形而上学を設定する必要があるという主張は注目すべきであると思う。しかし、本文中でも指摘したような疑問点もあり、第一原因‐第二原因という枠組みの中では本当に他の可能性は無いのか、また、Whitehead の世界観に基づく自然主義が対話の基盤として十分に機能するのかについては議論の余地があるように思う。

ではそもそも対話のためには自然主義において宗教と科学は共通の基盤を持たなくてはいけないのか。このもっとも基本的な点について私はまだ確信が持てない。というのは、宗教は何らかの意味で絶対的なものについて考えざるを得ないと思うのだが、自然主義は自然を絶対的な原理とみなすのであるから、宗教の考える絶対的なもの(ここでは神)と自然が同一視される、ことになる。よって、キリスト教を自然主義の観点から考えるという問題設定自体が、世界を神の体と考えるプロセス神学的な発想であるといえるからである。よって、宗教と科学の対話の基礎が自然主義に置かれるという Griffin の主張への判断は本書だけからは判断を留保せざるを得ない。

---

[4]「プロセス神学者たちは伝統神学のパラダイムの根底にあるアリストテレス・トマス的な形而上学そのものを修正するという道を選択したのである。(中略)　ホワイトヘッドの形而上学に基づくプロセス神学は＜神は世界を必然的に必要とする＞、と教えている。」『ホワイトヘッドの有機体の思想』　郷義孝　晃洋書房　p.204